

## グローバリゼーション下の内政・外交と地域秩序

アジア太平洋研究科 天児 慧

### ★私の問題関心

#### I、グローバリゼーション進展以前の国民国家システムにおける国内・国際秩序観

##### (1) 国民国家をどうとらえるか

- ①明確な国境があること、
- ②国境内に共通意志（国民意識）を持つ国民が存在すること、
- ③国民が主体となった生産・統一市場など経済活動（＝国民経済システム）が存在すること、
- ④国民の生活・生産活動を保証する統一的な政体が存在している状態。

★国内秩序とは①～④を持続的に保証している状態をさす。①～④を保障する権利が国家主権。「個人の存在を与件として個人から構成される」（石田淳, 国際政治 147. 1）

★国際秩序とは上記の国民国家が国際社会において圧倒的な中心アクターとして存在し、こうしたアクターが主体となって2国間あるいは多国間での対話、協議、交渉などのメカニズム、システム、あるいは法・ルールを形成し、それらを通じて国家間に生じた様々なレベルにおける問題、対立、紛争などを平和裏に処理し、既存の関係が継続して維持されている状態をさす。

「自律的な領域国家の存在を与件として国家から構成される」（石田〃）

##### (2) 国内秩序と国際秩序の関連性

###### ★石田淳の問題提起：（〃p2）

打開すべき難題は、国際政治学が、国内秩序と対照をなすものとして国際秩序を捉えてきたために、国際秩序の変動を国内秩序の変動と相互関連づけて解明する視点を全く持ち合わせてこなかったところにある。……国内秩序の変動と関連づけながら国際秩序の変動を捉えるという内政的な視座こそが……国際秩序論の新境地にわれわれを誘うものである」

さらに秩序の基盤（〃. p3）として石田は、①社会の正統な構成員に関する集団認識、②構成員間の関係を規制・構成する社会の規則にあることと捉え、→①②の変化として秩序の変動を概念化する。一つの秩序のこの意味での再編が、もう一つの秩序の再編に連動することを以って2つの《秩序の共振》を概念化できると指摘。

⇒しかし天児はこの理解はやや単純化しすぎたもしくは茫漠とした説明で、具体的な事象を理論的に理解するには不十分な概念化と考える。

・冷戦終結以前は国内秩序と国際秩序を連動させないで秩序全体を議論することが可

能＝相互連動の視点を持つ必要がなかった。

- ・冷戦終結以後は秩序の変動の基盤をなす国内社会と国際社会の構造的な連動、相互作用がドラスティックに進展しており、その必然的な結果として国内秩序と国際秩序のダイナミックな連動性、共振現象が生まれているのである（構成員の集団認識、社会の規則からの説明だけでは不十分）。

## II、グローバル化と国家機能——国家を弱体化、国内秩序を不安定化したのか

### (1) 市場のグローバル化＝経済の国際化、相互依存の進展→国民経済の崩壊

- ①社会主義経済の壁の突破、
- ②遅れた閉鎖的国家のグローバルな労働・生産・市場への参入、
- ③民族産業の国際化＝IMF、GATT、WTO、FTA→関税障壁の突破、国内産業構造→政治構造の転換  
⇒資本・生産の越境化、多国籍企業化の広がり：国家は産業、経済の何を守るのか？

### (2) 人の移動・情報のグローバル化＝国境の壁を劇的に低くする

- ①交通・運輸ネットワーク→人の移動を容易にする＝大量、自由移動の時代、大量の国際ビジネスマン、ワーカー、留学生の流入、長期移住
- ②ITの急速な発達→国家による情報独占打破＝情報共有の国際化
- ③人的ネットワークの国際化  
⇒National Identity、国家に対する国民意識の相対化、国際結婚・国際共同作業の増大

### (3) 国内的イシューの国際化・グローバル化＝国際協力を不可避とする範囲の急増

- ①環境問題（地球温暖化、酸性雨、大気汚染など）の越境性
- ②非伝統的安全保障問題（感染症、海賊、テロ、犯罪、人権問題など）の広がり  
⇒国家の役割は減少していない？新しいアクターの必要性？

### (4) ガバナンスの変質

→国内・国際社会の変容、流動化は社会の不安定化を促した

- ①国際社会におけるアクターの多様化（国家以外）：各種国際機関、地方自治体、NGO/NPO
- ②ガバナンスの多様化：  
Global Governance, Regional Governance, Sub regional Governance  
State-State Governance, Local Governance
- ③グローバル化で進む格差拡大のグローバル化→国家から排除される「負け組」  
＝「富者のための国家連携」？  
イラク戦争＝米国石油メジャーの意図、先進諸国の反テロ協力、富者国家中国の

## 米国接近

### (5) 国家は死滅するのか

- ① 従来持っていた国家機能の分散化＝経済主権の譲渡、戦争・平和をめぐる国連決議→国際社会、地域社会の制度化進展
- ② 国家アイデンティティの減少→マルチ(重層的)・アイデンティティの増大  
→それでも国家は死滅しない：アクター相対化の中で国家は主要アクターの役割を担い続ける
  - ・ 国内における国家の役割：問題処理・調整機能、社会安定の保障や秩序の維持
  - ・ 国内における独占的権力の維持：立法・行政機能、税の取り立て、警察・軍の維持、
  - ・ 国際関係における国家の役割：国家間の問題調整、国家間協力の必要性
  - ・ 国家のグッド・ガバナンスへの試み

### Ⅲ、国際秩序の変動と国内秩序の変動の因果連鎖

\* ガバナンスの効果的実体化が「秩序」

#### (1) 主権管轄境界とアイデンティティ境界の不一致性からの説明(石田淳の説明)

- \* 政体の自律の空間的範囲を確定する国境が政体間で国際的に再編されることになると、権利をめぐる対立が生体内に生じかねない。ここで対立の焦点となるのが《主権的管轄の境界》と《アイデンティティの境界》の不一致である。
- \* 国際再編とは自律の《領域的空間》の再編であり、……この過程は、国内において集団間の勢力分布に変化を発生させることによって、結果的に国内の知者・被治者間の相互抑制関係を基盤とする国内秩序を不安定化する。
- \* 連鎖の起点：国際社会が新生国家の独立を承認して、帝国が解体する場面→領域の再編に国際秩序の変動が観察できる(//P5)。

#### (2) パワー・トランジションによる秩序の再編成

- \* リアリズム的説明：ある国家の経済・軍事・政治・科学技術などのパワーの増大によって「総合国力」の急激な強大化し、従来の地域秩序あるいは国際秩序の枠組みが変更を余儀なくされる(パワー・トランジション)＝この場合、国内におけるパワー増大の要因、パワー増大の構造や制約性などは問題にしない。
- \* 国際秩序：1国ないし複数のパワーの大きな国(大国)の関係のし方によって形成・維持される
  - ⇒ 冷戦(米ソ2極のバランス) → ポスト冷戦(米の1極主導型秩序＝バンドワゴン)
  - ポスト冷戦後(中国の台頭→「和諧世界」の構築目指す：少なくとも米1国主導秩序ではないVS 米国主導型の補強)

#### (3) 国内・国際社会の構造変容に伴う国家間の利益配分の変化と調整による秩序の再編

成

- \* ネオ・リベラリズム的説明: 構造的相互依存 = マルチ・複合的相互依存の構造化 (経済、価値 [民主主義・宗教など]、安全保障などでの利害の共有の重層化。内政と外交の構造的リンケージ)
- 内政における経済発展優先は協調的外交を促進。内政における厳しい権力闘争は時に強硬外交の要因になる。
- \* 中国の台頭 → パワーの急増 = リアリズム的に言えば従来の秩序の挑戦者、しかしリベラリズム的に言えば現秩序における利益の共有者、秩序の維持者で必ずしも挑戦者ではない。
- \* ゼーリック 米 국무副長官「米中はステークホルダー」 / 中台関係、日中関係における政治対立の中の経済依存共栄による平和的秩序の維持。
- \* 「ディファクト」として進むアジアの経済統合による秩序形成 → 制度化されない数々の経済協力、経済連携 = 多国籍企業化、フォーラム形式による協力の合意 (チェンマイ・イニシアチブなど)

#### (4) 制度化進展による新しい質の秩序形成

- \* コンストラクティヴィズム的説明: 複数のアクターの相互作用の結果として生まれる相互依存的構造が何らかの共通のアイデンティティを生み出す ⇒ 「規範」の形成 (規範とは共通のアイデンティティを持つ主体間で適切とされる行動基準) → 「規範」の内面化。

参考: 【レジュームの形成 = 秩序の形成?】

- \* 強制に裏打ちされるレジューム形成
- \* 交渉を通じて形成されるレジューム
- \* 自然発生的に形成されるレジューム  
(「相互作用的意思決定の対象としてレジュームが生まれる」 Young, Oran R.)

#### (5) 具体的ケースの分析

- \* アジア通貨危機 → アジア域内協力の重要性認識 → 協力の推進 (FTA の推進、通貨バスケット方式の導入など) ⇒ 共通のアイデンティティとしての「(東)アジア経済共同体」の提唱 ⇒ 実現は「規範」の形成を意味。
- \* 中国の台頭 = どのような共通のアイデンティティを創るか、阻害要因か、規範は?
- \* アジアにおける経済統合のプロセス